令和元年度

ー テーマ・水について考える ー

水の週間記念作文集

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」三重県推薦分

目次

（掲載順は、学校名・氏名とも五十音順）

第41回全日本中学生水の作文コンクール　入選

「川の水のもたらす暮らしの豊かさ」　高田中学校　一年　米山百音　……1

第41回全日本中学生水の作文コンクール　佳作

第16回琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール　流域賞

水に感謝の気持ちを込めて　高田中学校　二年　梅村理紗子　……3

第41回全日本中学生水の作文コンクール　佳作

「千四百年の時をこえて」　皇學館中学校　一年　内田向日葵　……5

水と暮らし　三重中学校　一年　堀口明日羽　……7

七日間のキャンプ生活　高田中学校　二年　西尾嘉世子　……9

第41回「全日本中学生水の作文コンクール」について　……11

入選

「川の水のもたらす暮らしの豊かさ」

高田中学校　一年　米山　百音

私は、「水について考える」というテーマから、川の水のもたらす暮らしの豊かさと川の水が人々の生活にどのように影響しているかを考えてみたいと思った。

川は大雨が降ると増水、氾濫し水害をもたらすことがある一方、大事な飲み水や川魚などの食料を確保する場でもある。氾濫や土砂災害から人々の暮らしを守るため、行政は河川改修や砂防対策を行いダムを造った。これらの整備により人々の安心・安全な生活は確保された。しかし一方で、人々と川との関わりが薄くなってしまった様な気がするのは、私だけだろうか。

そこで、休日を利用し「水のまち」と言われている岐阜県の郡上八幡を実際に訪ねてみることにした。郡上八幡といえば、有名な徹夜踊りがある。「郡上おどり」の歌の歌詞を調べると、「郡上はよいとこ住みよいところ水もよければ人もよい」など、水に関係するものが多いことに気づく。郡上八幡に住む人々が昔から深く水と関わって生活していることがわかる。郡上八幡に行き町を歩いてみれば、川の水が人々の生活をどう潤しているのか感じることができ、水と人々の暮らしの中に何か発見があると考えた。

郡上八幡は岐阜県を流れる長良川の上流に位置し、奥美濃の深い山々を源流とする吉田川、小駄良川など三つの川が合流する所にある。標高は一〇〇m～一八〇〇mの山までと起伏に富み、名古屋から郡上八幡へ向かう車中からも壮大な自然風景を見ることが出来た。川の水が透き通っており、山と川の美しい色のコントラストに思わず目を奪われた。しかし水に恵まれているということは、想定を超える降水

量により水路から水があふれたり、川が大雨によって増水し、堤防が決壊したりする自然災害も起こりうる。実際に、平成三十年には豪雨災害が起こり、累積雨量が一〇〇〇ミリを超え、長良川鉄道の土砂崩れ、床上・床下浸水、河川護岸の崩落など被害は大きかったようだ。

町を訪ねてみると、郡上八幡の水道普及率は一〇〇％であった。それにもかかわらず、郡上八幡の人々は井戸や湧き水と共存し、大切に用水を護りながら暮らしていた。食べ歩きの飲食店近くの水路にも川にもプラスティックゴミ一つ落ちていなかった。町の人々の水を大切に思う気持ちが観光客にも伝わり、川を大切にし、水を汚さないようにさせるのだろう。我が家のように、水道だけしか使っていない家庭が圧倒的なのに、郡上八幡の人々は「便利な水道だけを使う」という選択をしていない。水とのつき合い方を歴史の中から学び、水に寄り添いながら暮らしているのだと思った。この町を取り囲む山々からの冷たい水は、町のいたる所で湧き出ていて、人々の暮らしになくてはならないものとなっていた。豊富で清らかな水が流れる水路が町をつなぎ、そこはたくさんの鯉や鮎が泳いでいた。また、水路が町を張り巡らしているため、いつでもどこでも水の音や流れを身近に感じることができた。まちなかの散歩が気持ちよく、水の流れる音や、鳥のさえずりなど自然の音で全身がリラックスできた。水は生活を送るうえで必要なだけでなく、人に安らぎを与えてくれることが分かった。町の人々の心も「水」を通してつながっているように感じた。郡上八幡という町は、私が想像した以上に水と人々の暮らしと関係が深く、「水」が生きる力の源になっている気がした。

水の大切さは、だれでもわかっているが、普段の生活では、水道の蛇口をひねればいつでも水が使えるため、そのことを、つい忘れがちになってしまう。郡上八幡の町を訪ねて、川の水がもたらす暮らしの豊かさを体で感じることで川に対する思いやりを持ち、水を大切に使うことがとても大事なことだと改めて気付かされた。

佳作・流域賞

水に感謝の気持ちを込めて

高田中学校　二年　梅村　理紗子

「いただきます。」

私の一日は、いつもおいしいご飯を食べることから始まります。使っているお米は、祖父が丹精込めて作ってくれた、私にとって特別なお米です。毎朝、このつやつやしたご飯を食べるたびに、どうしたら、こんなにおいしいお米がつくれるのだろうと考えていたので、祖父に聞いてみたことがあります。その時祖父は、私にこう言いました。

「田んぼに引いている水が良い水だからさ。人が飲んでもおいしい水をたっぷり使って米つくりをしているから、おいしくなるはずだよ。」

私はその祖父の言葉に、水がそんなに米つくりにとって大切なものなのかどうかが気になり、調べてみることにしました。

祖父が米つくりをしているところは、日本有数の多雨地帯である大杉谷を源流とし、伊勢湾に注ぐ「宮川」の上流に位置しています。宮川は、延長約九一キロメートル、流域面積約九二〇平方キロメートルで、三重県内では最大の河川です。また、国土交通省の水質調査で、これまでに十回以上、「水質が最も良好な河川」に選ばれています。この宮川の水は、伊勢志摩サミットで各国の首脳に飲料水として提供されたそうです。

宮川の水について、さらに詳しく調べてみると、地域住民の方たちによって宮川の水質を守るために様々な活動が行われていることがわかりました。その中でも、「トヨタ三重宮川山林プロジェクト」では、日光がうまく当たっていない暗い山林の木を間伐し、明るい森を作るという取組を行っているそうです。間伐によって森を美しく保つことで、きれいで養分

が豊富な水が宮川に供給され、人々にとって大切な宮川の水が保たれています。

穏やかな日ざしに照らされキラキラ輝くすき通った水、悠悠と泳ぐ魚、川をつつみこむような森林の深い緑。そのすばらしい宮川の風景は水を守るためにさまざまな活動を行ってくださる地域住民の方々がいるからこそだと実感しました。

水を守るということは、私たちが河川を汚さないというだけでなく、山や森を守ることもとても大切であるということがわかりました。また、このような取組は一過性のものではなく、私たちが継続して努力していくことが大切であると感じました。

一方、世界に目を向けてみると、毎日、おいしいご飯が食べられる私たちとは違い、安全な水でさえも利用できない人々がたくさんいます。

国連によると、二〇一一年では、世界人口の十一パーセントに相当する、約七・七億人が安全な飲み水を利用できず、三六パーセントに相当する約二五億人がトイレ等の基礎的な衛生施設を利用できない状態に置かれています。また、安全な飲み水を確保できない人たちは、生活に必要な水を得るために、毎日何時間も水くみをしなければならず、労働や学習などに使える時間を失っているそうです。特に水くみなどの作業は女性が担うことが多く、女性の地位向上をさまたげる要因ともなっているようです。

私は、このような世界の状況を知り、水が便利に使えるこの生活が、当たり前のものではないことを知ることができました。

生活するための水、農作物を作るための水。水は私たちが生きていくなかのあらゆる場面で使用され、かけがえのないものです。私は今まで想像してこなかった、美しい水が当たり前でないことや、おいしいご飯を毎日食べられることがいかに幸せなことなのかを実感することができました。美しい宮川の水を守るために森を大切にする活動を行ってくださる地域住民の方々、心を込めてお米をつくってくれる祖父に感謝の気持ちを込め、一粒一粒かみしめていこうと思います。

佳作

「千四百年の時をこえて」

皇學館中学校　一年　内田　向日葵

普段、私たちにとって水とは、そばにあって当たり前のような存在です。けれど、よく考えてみると、水がなければ、人間も動物も植物も、この地球で生きていくことができません。つまり、私たちにとって水とは、今この地球で生きていく上で、なくてはならない大切な存在なのです。

私たちは、神社に入る前に、手水舎で手や口を清めます。私はこの行動も日本人が水を大切に思っている証拠だと思いました。実は、約千四百年前から水で手を清めるという行為が行われてきたのです。私は、興味を持ち、そのことについて調べてみました。すると、六百三十七年から、斎王と呼ばれる女性が京の都から伊勢へ向けて旅立つ儀式が始まったことが分かったのです。そして、その斎王は桂川や、五十鈴川などで手を洗い、お清めをします。このことから、やはり昔の日本人も今の私たちと同じように水をとても大切にし、神聖なものだと考えていたんだと、推測しました。自然のものを大切にしようという心を持つことはとても良いことだと思います。

しかし、今では悲しい光景を目にすることもあるのです。それは、川などにゴミが捨てられているという事実です。そして、斎王も手を清められたという五十鈴川にもゴミが落ちていたのを見ました。それを見て私は、昔の人々も大切にし続けていた水を、そんな風に、同じ人間である私達が、よごしても良いのかと悔しく思ったのを覚えています。もちろん、川の清掃活動などを行い水を大切にしようとしてくれている人はいますが、それでもまたよごされてしまうのでは、意味がありません。一人一人が気をつけていれば、昔と同じようにきれいなまま残し続け

ることができるはずですが、誰かが水を大切にする心を持たず、ゴミを捨てるだけで、きれいな水を残し続けることが不可能になってしまうのです。「ただ水を大切にしようと心がけるだけ」とても簡単なことに思えますが、どうしても実現しません。

昔の人の思いがつまっていたり、同じ感覚を体験することができる水は、この地球にとって、宝物だと私は感じます。ですから、そんな大切なものに、平気でゴミを投げ入れるのは、絶対にやってはいけない、許せないことです。

私は以前、川へ行った時、ゴミが落ちていることに気づいて、ひろったことがあります。大きなゴミや小さなゴミなど、数えきれないぐらいでした。全て、ひろっていたらきりがないくらいです。本当に水を大切にしてきた昔の人々がもし今の様子をみたら、とても悲しく思い、今の私たちの自然を大切にする心のなさに、驚き、そしてあきれるだろうと思います。そう考えると、昔の人や、そしてこれからこの地球に新しく誕生する人々に失礼だと、私は思いました。昔の人々が、私たちにきれいな水を残し続けてくれたように、私たちも未来の人々に向けて、きれいな形のまま残すことができたら、これから先、ずっと同じきれいな水を見ることができます。時をこえても、今まで、同じ水に触れてきた人々と同じ気持ちを感じて、つながることができるはずです。今を生きる私たちが、できることは、一人一人がきれいな水を保てるように心がけることだと思います。

先日、伊勢神宮の五十鈴川で手を洗いました。ひんやりとして気持ちが良かったです。きっと、斎王や他の人々も同じような気持ちだったんだろうと考えると、わくわくしました。そして、新ためて昔の人と同じように、地球上の全ての水を大切にし、よごしてしまうことがないように、一生心がけようと思うことができたのです。私は心に決めました。

「千四百年前の人々の思いを受けついで、さらに千四百年後の未来の人々に残したい。」と。

佳作

水と暮らし

三重中学校　一年　堀口　明日羽

「かなり水位が下がっているな。」

祖父の家に向かう車の中での父の一言。祖父の家は志摩市にあり、途中、緑豊かな伊勢道路の山道をくねくねカーブしながら進んで行くのだ。その道を進んでいきトンネルを過ぎたところに広がっているのが神路ダムである。

神路ダムは、志摩市の上水道の水源として作られたダムで、貯水率が下がると志摩市民への水の供給が不安定になるだろうとの思いからの父の言葉なのだ。

以前この言葉が出たとき、母も子供時代の話をした。母が子供時代を過ごしたのは四国である。四国にも早明浦ダムという上水道をはじめ、工業用水、発電など生活に必要な水が使用されている四国地方最大のダムがある。この早明浦ダムが渇水した時は大変だったという話だ。

ダムが渇水で貯水率が減少し続けて、普段はダムの水に隠れて見えない旧大川村役場が見えるようになったとテレビなどで報道されると、四国の家庭では給水制限がはじまる。はじめは減圧給水と言い、水道の水圧を下げて蛇口から出る水の量を少なくする方法から開始する。母の話では、蛇口をかなり開いても水が細い線のように出るだけで、違和感を感じたそうだ。しかし、減圧制限はまだ良い方で、時間制限になった隣県では夜間断水も行われたそうだ。

こういう出来事に直面した時、水の大切さがわかったと母は言った。普段は、蛇口をひねると普通に水が出る。無限にあるように思えるくらいあたり前に毎日使用している。しかし、実際水が蛇口から出なくなった時、普通には生活が出来なくなるのだ。

実際に東日本大震災の時、東京に住む母の友人は一歳の娘さんとスーパーの行列に並んだのだが水は完売だったそうだ。さらに東北の人は断水で思うように水が手に入らなく不便だったと平成をふり返るテレビ番組で見た。

ぼくが生活する上で、一人当たり一日二百リットル使用する。顔を洗い歯をみがき、お風呂にトイレ、食事に片づけ。ふと思い浮かべるだけで水を使用することが多い。断水するとこれらの生活があたり前に出来なくなるのだ。

また、人間自体も水で出来ているようなものだ。人間の体の五十から七十パーセントは水で出来ている。水を一滴も取らないと四・五日で命を落としてしまうこともあるそうだ。昨年は、記録的な猛暑日が続いた。災害級の暑さという言葉も聞いた。夏休みのプールもほぼ中止だった。脱水症状など熱中症で緊急搬送される人も多かった。その反面、西日本豪雨などの記録的豪雨で人が亡くなるという悲しいニュースも少なくなかった。

水について話を聞き、調べることで水のありがたさと水の怖さを思い知った。人と水とは、切っても切れない関係である。人は水がないと生きていけないのだ。地球上の生物は水が必要なのである。

災害対策として、ぼくの家ではペットボトルの水を備蓄している。飲料水としての水である。一日一人三リットルの飲料水が必要なので二、三日分しかないがやはり備蓄することは大切だと思う。給水用のポリタンクも用意がある。給水場を知ることも大切だ。

水自体の対策も必要だ。生活が急速に便利になってきたが、それにより、水質汚染、二酸化炭素の増加による地球温暖化など問題が次々に起きている。それにより、猛暑や豪雨が起きている。水質汚染、水不足の対策として、ぼくが出来ることをしよう。節水ならすぐにでも出来る。排水時にも油などを直接流さないなどキッチンからの汚れを最小限に気をつける。洗剤やシャンプーの使いすぎにも注意をする。こういう個々の活動により、少しずつでも改善していき、美しい水が未来にも存在し続けて欲しいと思う。

佳作

七日間のキャンプ生活

高田中学校　二年　西尾　嘉世子

二〇一八年、夏。私は、日本全国から一万人もの中高生の人が集まる野営大会に行った。場所は石川県珠洲市。珠洲市は能登半島の最北端にある市で、海もある、自然の豊かなところだ。私の住んでいる三重県からは、車で約七時間かかるが、キャンプにはもってこいの場所だ。また、この野営大会のためにキャンプ会場には仮設のシャワー室やトイレ、上下水道が整備された。そんな場所で、私は三重県からきた人たちと一緒に、七日間のキャンプをした。

キャンプ地に着いたとき、会場の広さに驚いた。そこは広大な草原だった。こんなにも広い場所がテントで埋め尽くされるのかと思うと、頭がくらくらしそうだった。また、水道までが、遠くに少し見えるぐらいの距離で思っていた以上に遠く、ちょっと不便かもしれないと不安に思ったが、楽しみにしてきた七日間のキャンプ生活への期待のほうが大きかった。

キャンプ地に着いた初日は、水分をとるのを忘れればすぐに熱中症になってしまうぐらいに、とても暑い日だった。だけど、グループの中のリーダーが飲み物をたくさん用意してくれたので、グループの中では誰も熱中症になる人はいなかった。

二日目からは、自分たちで炊事をしなくはいけなくなった。必要な食材や薪は大会が用意してくれていた。そこで、料理をするために必ず必要なのが火と水だ。火は、火で熱さなければ食べられない食材があるため必ず必要なもので、マッチと新聞紙と薪さえあれば、おこすことができる。一方で、水は食品や手を洗い、衛生的に食事をする上で必要なものだが、このキャンプのときの水源となる水道は、グ

ループのキャンプサイトから少し離れたところにあったため、わざわざ汲みに行かなければいけなかった。普段の生活であれば、すぐにそこにある蛇口をひねればいつでも水が使えるので、普段の生活は豊かであることを実感した。

また、調理をしたあとなどに出た汚水は、グループのキャンプサイトの中の大きめのタンクに溜められ、自分たちでそのタンクを水道の近くにある下水道のところまで運ばなければいけなかった。最初は、適当なところに穴を掘って処理しても大丈夫なのではないかと思ってしまったが、よくよく考えてみれば洗剤も使っており、洗剤を自然の中に放置するのは自然に悪い影響が出るに違いないので、ちゃんと処理しなければいけないと思った。普段の生活の中では、洗剤など、自然に悪いものが混ざっている汚水は、自然に還ってしまわないよう、下水管を通って、処理場に運ばれるので、とても衛生的で便利な世の中だと感じた。

キャンプ二日目の夜のこと。一日目には時間がなくて浴びに行けなかったシャワーを浴びに行くことになった。シャワー室へ出発する直前に、リーダーから

「シャワーの水は冷たいから、足先から浴び始めないと、心臓がビックリして危ないから気をつけて。」

と、言われた。そして、温かい水が出てくるとばかり思っていた自分に気がついた。このとき、安全な温かい水が出るのは当たり前のことではないということを身をもって実感した。

私はこの七日間のキャンプで、水を通じて日々の生活で当たり前のことは必ずしも当たり前のことではないということを学んだ。例えば、水を使いたいと思ったときにいつでも、いくらでも使えるということなども、特に災害が起きたときには決して当たり前のことではない。これからは、この七日間のキャンプの経験を災害のときなどに生かすべく、今、当たり前なことは本当に当たり前のことなのか、自分で考えながら生活しようと思う。

第４１回「全日本中学生水の作文コンクール」について

「水の週間」（８月１日～７日）行事の一環として実施された、第 41 回「全日本中学生水の作文コンクール」の概要は次のとおりです。

１　応募要領

（１）課　　題　　「水について考える」（題名は自由）
（２）原稿枚数　　400 字詰原稿用紙 4 枚以内
（３）募集期間　　平成 31 年 1 月 15 日～令和元年 5 月 10 日
（４）版 権 等　　・応募作品は自作未発表のものに限る。
・応募作品の返却は行わない。
・入選作品の版権は主催者に帰属する。

２　地方審査

第 41 回「全日本中学生水の作文コンクール」審査基準に基づく審査により、優秀作文５編を決定しました。

審 査 員（４名）
三重県中学校国語教育研究会会員
三重県環境生活部大気・水環境課職員
三重県企業庁企業総務課職員
三重県地域連携部水資源・地域プロジェクト課職員

３　三重県の応募状況

応募学校数	応募総数	学　年　別		
		1 年生	2 年生	3 年生
4 校	575 名	230 編	310 編	35 編

４　中央審査

各都道府県から推薦された優秀作文は、国土交通省におかれる中央審査会で審査され、最優秀賞１編、優秀賞９編、入選３２編、佳作（最優秀賞、優秀賞、入選を除く作文）が決定されました。

５　主催・共催

主催　水循環政策本部、国土交通省、三重県
共催　琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会

６　そ の 他

優秀作文５編については、「琵琶湖・淀川流域水の作文コンクール実行委員会」（構成団体：三重県、滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県）でも審査され、流域賞１編が決定されました。

三重県　地域連携部　水資源・地域プロジェクト課　　（令和元年７月）